

防災への備えを考える

防災は生活の基本

三月十一日に発生した東日本大震災では、大津波によりたくさんの尊い命が奪われました。半年を過ぎても個人の生活再建が進まない状況の中で、今私たちに問われているのは、「被災地のために何ができるか」という視点のみならず、明日はわが身という気持ちで自然災害に備えることです。3・11の大震災が明らかにしたことの一つは、「想定外の被害」を引き起こすような大震災が、現実には起きたということであり、そしてこれで終わりではないということです。

地球の地殻変動が活発化するなか、日本も地震の活動期にあり発生時の切迫性が指摘されている巨大地震がいくつもあります。そもそも、わ

直し、ときにはこれまでの考え方を一八〇度変え、人生を賭けて立ち向かう覚悟なくして生き延びることはできません。

自宅が被害を受けるということは生活の基盤を失うということであり、生活再建の厳しさは生涯にわたります。さらに、避難所生活におけるプライバシーの問題やストレスに起因する病気の発生、性犯罪や留守中の侵入窃盗など多様な問題が発生します。このように、非常持ち出し品を用意するだけでは防災と言えず、被災後も住み続けられる家しておくことが、被災生活で起きる様々な問題を最小化するのです。

防災を面倒と感じさせない建物づくり

ところで、耐震性能が高い家、しっかりと耐震補強をした家に住むことは重要であるものの、安全な住まいを確保するには構造的な強さだけでは不十分です。窓ガラス、外壁仕上げ材、外壁取付物、屋上設置物、ブロック塀、天井材などの非構造部材についても、地震時の危険を軽減する対策が望まれます。しかし、構造に対する地震対策にはさまざまな基準や方法がありますが、非構造部材の安全対策については対応が遅れています。家を作る際には構造の強さに見合う非構造部材の設置が望まれますが、そのた

が国では地理、地形、気象などの国土条件から台風、地震、津波、火山、豪雨、雷、雪害、竜巻などの自然災害が発生しやすいことを自覚する必要があります。切迫している地震をイベントのように考えてしまうと、「いつ来てもおかしくないというわりには来ない」と備えることに息切れし、疲れ果ててしまうおそれがあります。日本に住む以上はどのような災害がいつ何時発生しても対応できるように備えておくことを習慣化し、防災は生活の基本として生活に馴染ませなくてはなりません。

防災とはなにか

防災といえどかく「災害時に必要なものを買う」非常持ち出し品の備え」に偏りがちです。

めには耐震性の高い非構造部材の開発や、オーナーに積極的に取り入れてもらうための情報の提供が欠かせません。間取りを設計する際には家事動線に気を配る以上に、災害時の避難動線を重要視した間取りを提案していただきたいと思えます。たとえば、一階の台所から火災が発生した場合、上昇する煙の性質を鑑みながら、二階にいる居住者が有毒ガスを含んだ煙を吸うことなく避難するにはどうしたらよいかということなく避難するにはどうしたらよいかという視点で考えてみるのが重要です。

さらに、家具の配置についても強震を意識し、避難動線を塞ぐおそれのあるドア近くには置けないような間取り、居室には家具を置く必要のないくらいのおたふりとした収納スペース（ウォークインクローゼットなど）を設置するなど、普段生活する上で無理なく防災対策ができる部屋づくりを推進していただきたいと思えます。とくに、冷蔵庫、食器棚、テレビ（テレビ用コンセントをどこにつけるかである程度決まります）などあらかじめ使用する場所が決まっている大型家具については、壁の強度を強くする、補強材を設置するなどして固定器具を設置しやすくするほか、揺れの影響を受けない方向に設置できるようコンセントの場所に対しても細かい配慮が求められます。

株式会社危機管理教育
研究所代表
国崎信江
Nobue Kunizaki



しかし生命、身体および財産を守ることこそが防災であり、まず見直すべきは「安全な土地であるか」「自然災害に耐えうる建物であるか」ということです。東日本大震災では、先人の言い伝えから高台に移り、被災を免れた集落があります。その土地の災害被害の受けやすさ、危険度を知り、たとえば液状化のおそれがあれば地盤を改良し、土砂災害の恐れがあれば引越すなど思い切った対策が求められます。ところが、大抵の方が「そこまではできない」と考えます。確かに、いつくるかわからない地震に対して巨額を投じるのは大きな賭けに思われるかもしれませんが。

しかし、とてつもないエネルギーをもって私たちが襲う自然災害に対して、生き方を見つめ

被災時自宅でも生活できるように

被災後も自宅で生活するためには、ライフラインが途絶えた時に助けとなる機能があれば心強いものです。たとえば自然由来のエネルギーとして蓄電式の太陽光・風力発電、雨水マスマは耐震性井戸などもその一つですが、それぞれが総合的にスマートに動くシステムが求められます。非常時にはスイッチ一つで災害時モードに切り替わり、できるだけ災害前と変わらない生活ができれば理想です。とくに、家庭に医療機器を装着しながら自宅で療養している家族がいる場合にはそのシステムが本人にも家族にも大きな負担軽減につながるでしょう。

さて、非常時の備えで困ることの一つに挙げられるのが、置き場所がないということですが。解決するには、あらかじめ室内に防災グッズ置き場を作っておく間取りを標準化してはいかがかと思えます。玄関以外に、一階のリビングや二階の寝室など使用する場所ごとに必要なものを置けるスペースを確保しておくことが安心です。

これまでは避難を前提に防災が進められてきましたが、これからは土地の選定からライフラインの確保にいたるまで避難しなくてもよい家づくりが主流になることを期待しています。